

## 2005年度出題傾向から見た新課程の入試問題

学校法人河合塾専任講師 佐藤裕治

### 1. はじめに

2006年度から新課程での入試が始まるが、今年度の入試問題にすでに新課程を意識した出題がかなり見られた。2005年度のセンター試験と国立二次・私大の入試問題から新課程の出題傾向を考えてみた。

### 2. センター試験の出題傾向

#### ■正誤文判定と図表の判読

年	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005
正誤文判定*1	16(17)	18	18(19)	15(18)	14	8(10)	9	16	19
組み合わせ解答*1	0	2	1	6	6(7)	14(15)	13	12	10
図	10	12	15	20	16	19	21	18	18
表	3	7	4	7	5	7	5	6	3
写真*2	0	4(4)	3(9)	1(4)	1(1)	2(7)	3(3)	1(3)	0
マーク数	36	36	36	36	35	35	35	35	35
平均点	67.2	77.2	62.3	58.2	63.6	66.3	55.0	62.1	70.22

\*1 括弧内はマーク数を示す。\*2 括弧内は写真の枚数を示す。

表1 センター試験の出題形式

センター試験の形式、分量について見ると、解答数（マーク数）は2001年にそれまでより1個減って35個となっている。センター試験の開始当初のマーク数が44個もあったのに比べ、マーク数は減少し、一時途絶えていた組み合わせ解答が増えている。また図表や写真を用いた問題は、写真が若干減った以外には大きな変化はなかった。センター試験で正誤文の判定や図表の読み取りに関する問題が多いことから、地名や用語を単に知っているかどうかではなく、内容をきちんと理解しているかを試そうとする出題の意図が読み取れる。近年はグラフや統計地図を示し、そこから読み取れることを説明する文章の正誤を判定させる形式が頻出している〔例題1〕。これは地図やグラフなどを判読する能力は「リテラシー」の一つであり、地理をこうした技能（スキル）を身につけるための教科と位置づけていることが伺われる。一

方で、こうした問題では図をきちんと読み取れば、地理的知識がなくても対応できることになる。

#### ■独立した小問の集まり

センター試験では、大問5題にそれぞれ小問が6～7問あり、マーク数は大問ごとに7個、全体で35個という形式がここ5年間定着している。各大問は、一応テーマはあるものの、設問内容は多様で総花的である。かつてはよく見られた、大問の最初に10行前後のリード文があり、そこから下線を引いて小問に誘導する形式は、1999年度を最

後になくなった。各小問がそれぞれ独立した問題であり、極端にいえば、過去の小問をシャッフルして、適当に並べ直せば新しい問題とすることができるようなつくりになっている。これは、センター試験での過去問の再利用をある程度意識してのことかも知れない。

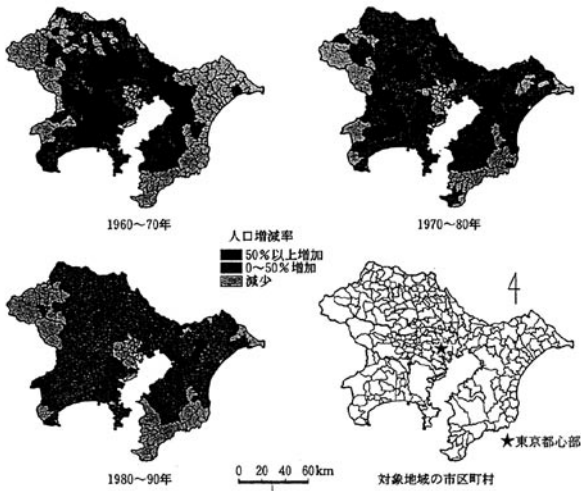
まったく同じ問題が再度使われることは

考えにくいですが、同じようなテーマを多少資料や文章表現を変えて出題することは十分にありうる。したがって、センター試験の過去問を用いた問題演習は効果的といえよう。

#### ■基本的知識をストレートに問う

一方、自然環境に関する問題には、これまでとは異なった傾向が見られた。本試地理B第1問の間1では、世界の大地形の分布図から古期造山帯を判定させ、問2では、同じ図のかつての Gondwana 大陸の地域に石炭、鉄鉱石、銅鉱の産地を示しその判定を求めている〔例題2〕。1997年度からの課程では、自然環境の基本的知識に関してここまでストレートに問うことはほとんどなく、人間生活との関係などを述べた文章から判断させる問題が多かった。

問 7 次の図3は、1960年～1990年の三つの時期における東京圏(島嶼部を除く東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県)の市区町村別人口増減率を示したものである。図3について説明した文として適当でないものを、下の①～④のうちから一つ選べ。 14



市区町村の境界は1990年のものである。  
国勢調査により作成。

図 3

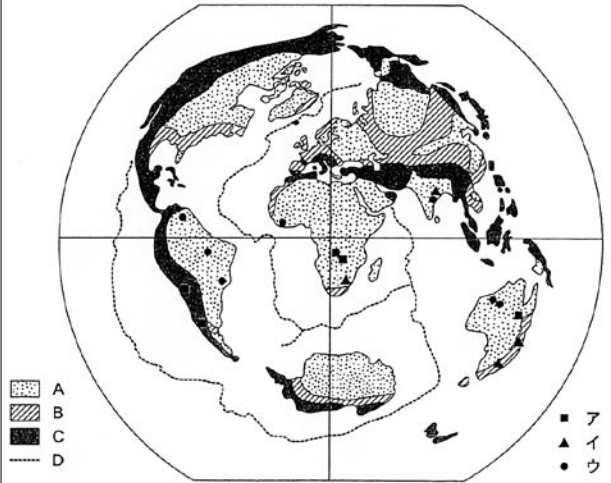
- ① 人口のドーナツ化現象は、1960年代に顕在化していた。
- ② 東京都心部から30km付近では、1970年代に人口増加率が最も高かった。
- ③ 人口増加率が50%以上の市区町村の数は、1980年代には減少した。
- ④ 外縁部の市区町村には1960年以降、人口減少が続いているところがある。

【例題1 2000年センター地理B本試第2問 問7】

### ■ケッペン気候区分の復活

アフリカの河川を、流域の年流出量とケッペンの気候区分で判定させる問題 [例題4] が出題されたが、気候をケッペンの気候区分記号のみで示した問題は、難問で話題になった1991年第1問以来であった。この間、気温の年較差や降水量の季節変化などの特徴がわかれば、ケッペンの気候区分の記号は知らなくとも解ける問題しか出題されなかったことを考えると、やや先祖返りした感があるが、新課程で自然環境の扱いが大きくなっていることと合わせて、大地形区分やケッペンの気候区分などのおおまかな分布の特徴の学習が求められていると見るべきであろう。『新詳地理B』では、気候帯ごとの分布図が大きく、主要河川の流域も示されているためこうした学習には効果的

問 1 次の図1は、世界の大地形の分布を示したものであり、A～Dは安定陸塊、海嶺、古期造山帯、新期造山帯のいずれかである。古期造山帯に該当するものを、下の①～④のうちから一つ選べ。 1



赤道上、東経20度の地点を中心にした正距方位図法。  
貝塚爽平ほか編『日本の平野と海岸』などにより作成。

図 1

- ①  A
- ②  B
- ③  C
- ④  D

問 2 図1中のア～ウは、かつて Gondwana 大陸を構成していた地域における石炭、鉄鉱石、銅鉱のいずれかの資源の主な産地を示している。ア～ウと資源名との正しい組合せを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。 2

	①	②	③	④	⑤	⑥
ア	石炭	石炭	鉄鉱石	鉄鉱石	銅鉱	銅鉱
イ	鉄鉱石	銅鉱	石炭	銅鉱	石炭	鉄鉱石
ウ	銅鉱	鉄鉱石	銅鉱	石炭	鉄鉱石	石炭

【例題2 2005年センター地理B本試第1問 問1問2】

といえる。

### 3. 国公立二次・私大の出題傾向

#### ■入試問題の二極分化

国公立大二次・私大の近年の傾向として、記号型(マーク式を含む)がやや減少し、記述型を含む問題がやや増加している。しかし、大学の難易度ランク別で見ると二極分化が見られ、偏差値47.5以下の大学では記号型の地誌問題が多く、リード文を用いて空欄補充する形式の問題が多く、覚えることが勝負の知識確認型の問題が多いのに対して、偏差値55.0以上の大学では、論述を含む問題

問5 次の表1中のカ〜クは、図4中のコンゴ川、ザンベジ川、ニジェール川のいずれかの流域における年流出高\*と主な気候区\*\*を示したものである。河川名とカ〜クとの正しい組合せを、下の①〜⑥のうちから一つ選べ。 **5**

\*1年間の河川総流出量を流域面積で除し、水深に換算したものを。  
\*\*ケッペンの気候区分による。

表 1

	年流出高(mm)	流域における主な気候区
カ	338	Af, Aw
キ	168	Aw, BS, Cw
ク	92	Aw, BS, BW

権根勇『水と気象』などにより作成。

	①	②	③	④	⑤	⑥
コンゴ川	カ	カ	キ	キ	ク	ク
ザンベジ川	キ	ク	カ	ク	カ	キ
ニジェール川	ク	キ	ク	カ	キ	カ

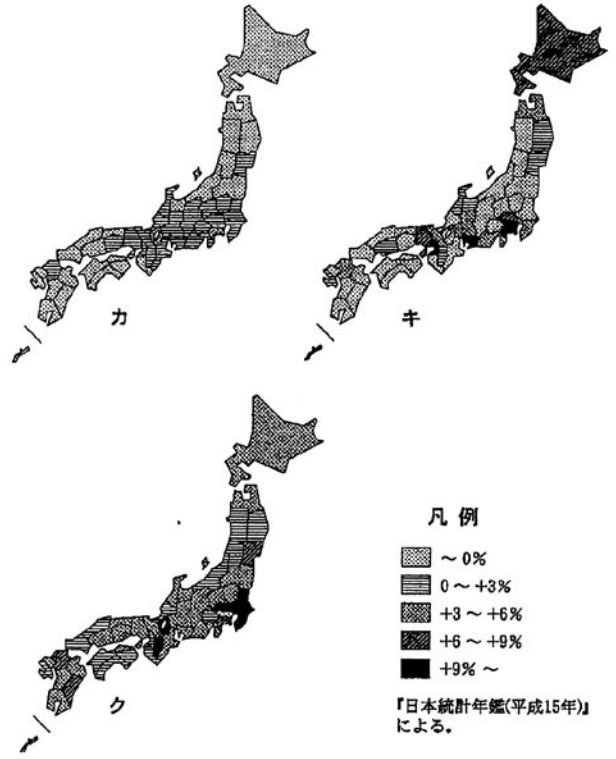


図 4

[例題3 2005年センター地理B本試第1問 問5]

が増加している。しかし、論述問題の解答字数を見ると、100字以下の比較的短い論述問題が大半を占め、300字を超えるような長い論述問題は減少している。18歳人口が減少するなかで、比較的收入りやすい大学では、受験生の負担を軽くし受験しやすくしようとする配慮が見られるのに対し、難関大学では、論述問題を課して学力ある学生を選抜しようという意図が読み取れる。しかし、おそらく採点の手間を考えると、長い論述問題はたいへんだということか、50字前後の比較的論点が明確な問題が出題されることが多い。

(3) 次の図カ〜クは、①1955〜60年、②1975〜80年、③1995〜2000年のいずれかにおける、日本の都道府県の人口増減率を階級区分図で示したものである。①〜③に該当するものをそれぞれカ〜クから選び、a欄に記号で答えよ。またこれら3つの図から読み取れる、第二次世界大戦後の日本における人口動態の地域的特徴について、b欄に100字以内で記せ。

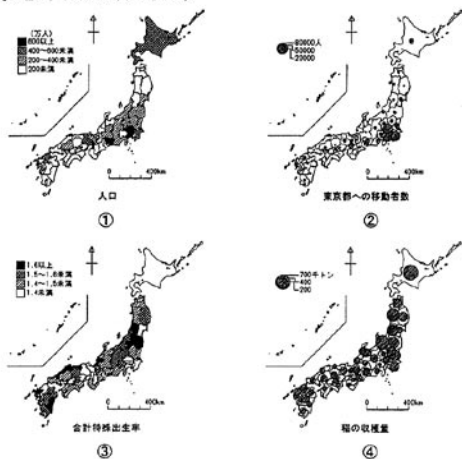


[例題4 2005年京都大IV問(3)]

### ■主題図を使用した問題

新課程で、地理的技能が重視されていることへの先取りか、2005年度の入試問題では、主題図をあつかった問題が多く見られた。その多くは、統計地図から読み取れることや指標を判定させる形式のもの [例題4] だが、主題図の表現方法の適否に関する問題もいくつか見られた。例題5では、統計地図の表現方法に関して、階級区分図は相対値を示す地図として用いるべきであって、①の人口のような絶対値を示すには適さないことを答えさせているが、このような絶対値を階級区分図で示した不適切な統計地図は実社会にはあふれている。『新詳地理B』では、〈技能をみがく〉というコーナーで主題図の見方と作り方について実例をあげた説明があり、絶対分布図と相対分布図の違いについてもきちんと説明されている。また、階級

問1. 次の①～④の統計地図のうち、(1)示される統計データに対して表現方法が適切でないものを1つ選んで記号で答え、(2)その理由を述べよ。



【例題5 2005年埼玉大第2問問1】

区分図における階級の取り方の適否についての説明も、今後増えると予測される地理的技能を扱った入試問題のひな型になると思われる。

### ■ 論述問題の内容

私大では、選択肢を与える記号式や語句を答えさせる記述式が中心で、完全にマーク式のみを採用しているところもあり、論述問題中心の大学は少ない。また、一般に私大の論述式問題は、事項の説明など比較的答えやすい問題が中心である。これに対し、国公立大では、いずれも何らかの形で論述問題を含んでおり、論述内容も単なる説明ではなく、ややひねりを加えたものが多い。国公立大の論述問題の傾向を整理すると次のようになる [表2参照]。

- ① **要因・成因を問う**：特定の事象の要因や背景、地形や気候など自然環境の成因を説明させる。
- ② **比較させる**：2地域の自然環境や産業をあげ、その共通点や相違点などを説明させる。
- ③ **変化を読ませる**：経年変化のグラフや、統計年次の異なる表を示し変化の特徴を説明させる。
- ④ **問題点を指摘させる**：環境問題、人口・食料問題、民族問題などの内容や課題を説明させる。
- ⑤ **資料を判読させる**：地形図や統計地図などの資料を示し、そこから読み取れること説明させる。変化を読み取らせる問題は、とくに日本に関する出題で多く見られ、1960年代の高度経済成長、

### 設問B

都市の規模を表す指標としては、人口がよく用いられる。人口には、一般に使われる夜間人口(常住人口)のほか、昼間人口がある。昼間人口は、働いている職場や通っている学校の場所を考慮した人口である。たとえば、A市の昼間人口は、次の式で計算される。

$$\begin{aligned} \text{A市の昼間人口} &= (\text{A市の夜間人口}) \\ &\quad - (\text{A市からの通勤・通学による流出人口}) \\ &\quad + (\text{A市への通勤・通学による流入人口}) \end{aligned}$$

また、昼夜間人口比率は、夜間人口100人あたりの昼間人口の比率で表す。

- (1) 次のページの表2は、三大都市圏都心部の昼間人口・夜間人口の推移を示したものである。この表によれば、1965年から1990年までの間には、昼夜間人口比率は一貫して上昇した。その理由を、2行以内で述べよ。
- (2) しかし昼夜間人口比率は、1995年から2000年にかけて初めて低下に転じた。このような昼夜間人口比率の低下は、昼間人口の減少と、夜間人口の増加とによるものである。そのうち、夜間人口の増加の理由として考えられることを、次の語句をすべて使用して、2行以内で述べよ。語句は繰り返し用いてもよいが、使用した箇所には下線を引くこと。

再開発 地 価

表2

年	昼間人口 (千人)	夜間人口 (千人)	昼 夜 間 人口比率
1965	16,047	13,985	114.7
1975	16,877	13,505	125.0
1985	17,111	13,107	130.5
1990	17,508	12,850	137.0
1995	17,538	12,676	138.4
2000	17,304	12,837	134.8

三大都市圏都心部は、東京都特別区部・大阪市・名古屋市。  
国勢調査による。

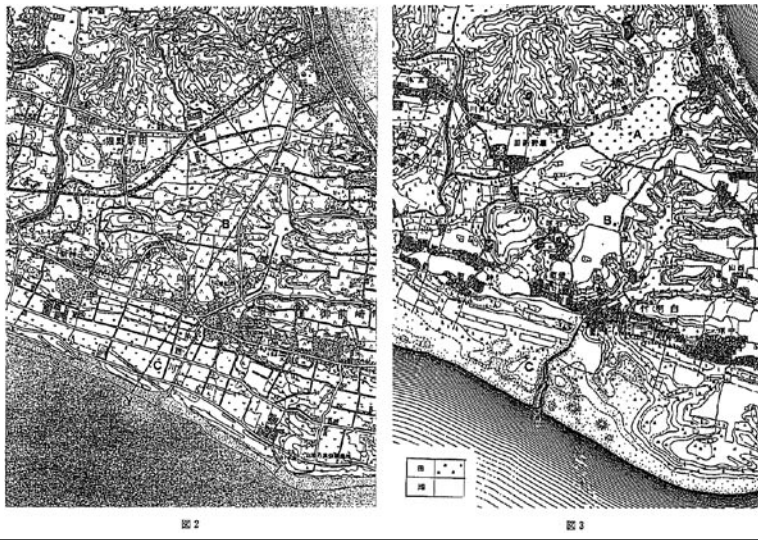
【例題6 2005年度東京大第3問設問B】

1970年代の石油危機、1980年代の円高、1990年代のバブル崩壊などと関連させて、人口動態や産業構造の変化などを問う問題 [例題6] が多い。こうした時代変化をきちんと学習させるには経年変化を示したグラフが必要となるが、『新詳地理B』では、20数種類もの経年変化グラフが掲載されている。また、比較・変化・資料の判読などを合わせた内容を問うものとしては、新旧地形図を使った問題があるが、帝国書院の各教科書とも新旧地形図を扱ったコーナーがあり、とくに『高等学校新地理A』の〈技能と開発のコーナー〉で取り上げられた洪積台地の断面や土地利用の変化などは、今年の筑波大の問題 [例題7] の出題内容と酷似している。

II 13ページの図2は、静岡県御前崎の2万5千分の1地形図(国土院1988年発行、原寸)の一部であり、14ページの図3は、その72年前の地形図(大日本帝国陸地測量部1916年発行、原寸)の一部である。ただし、図2の原図は3色刷りである。また、図3左下の凡例は当時の地形図における田と畑の記号を示している。図2と図3に関する以下の問に答えよ。

問1 図2中のA、B、C地点を通るXからYにかけての地形断面図を概略的に描き、その中に土地利用を模式的に記入せよ。

問2 図2と図3を比較し、A、B、C地点の地形的特徴、ならびに各地点周辺における土地利用変化とその原因について、200字以内で説明せよ。



【例題7】 2005年度筑波大(自然科学系)II

### ■地誌問題

地域の側から自然環境や産業などを扱った総合的な地誌だけでなく、系統的項目で具体的地域を扱ったものも含めると地誌形式の出題は多く、とくに私大では、地誌問題の占める割合が高い大学が多い。早稲田大などは各学部(政経・商・教育)とも、モンスーンアジア、ヨーロッパ、北アメリカの出題頻度がきわめて高く、毎年、この3地域に他地域または系統項目の問題を1~2題加えて大問が構成されている。ここまで、徹底してはいないがこの3地域は各大学とも、出題頻度が高い。地誌問題では、かつてしばしば地名を扱った難解な問題が見られ、受験生もそうした地名と物産を覚えることが地理の学習であるかのように思っているものが多かった。最近の入試では、細かな地名の難問は少なく、単に鉱産物や工業製品と地名を組み合わせたような問題はあまり見られ

なくなった。一方、地図帳を横に置いて作られたと思われるような問題【例題8】はかなり多く、受験生が一般に地名に弱くなっているだけに、こうした地名の問題が「差のつく問題」になっている。教科書では、地名の記載は少なくなっており、センター試験では単純な地名の問題の出題可能性はより低くなると思われるが、インドのIT産業が注目されるようになってバンガロールの地名の

出題頻度がきわめて高い。また、環境問題が重視されるようになってフライブルクの地名が入試でも取り上げられるようになった(両地名とも、『新詳地理B』ではコラムで取り上げられている)。こうした話題性のある地名は今後も出題されると思われる。地図帳を活用し、略地図などを描きながら地域の整理をする学習が効果的であることは間違いない。

3 次の各文は、河川もしくは湖沼に面して発達したアメリカ合衆国の都市について述べたものである。文を読み問いに答えよ。

1. (A)は、(W)川に面して発達した都市であり、対岸のセントポールとは双子都市の関係にある。セントポールは州都であり、石炭採掘が興中しているのに対し、(A)は加工業都市としての性格が強く、(D)は湖沼を背景とした農業加工業のほかに、繊維産業や機械工業が発達している。
2. (E)は、(X)川に面して発達した都市であり、州都である(X)川を挟んで市場が発達した。このため、同名の都市が二つの州にまたがって存在する。この2州のうち西部に位置する州は、「アメリカのパン」がとられるなど小麦の生産量がアメリカ合衆国の中では最大であり、(E)はその重要地帯を占めている。
3. (C)は、(F)川とクワイメット川の合流点近くに発達したオレゴン州の中心都市である。歴史的にはアメリカ合衆国北西部の開拓拠点であり、元種する(E)州のシアトルとともに、銀業から林産物の産出であった。今日では、外洋船が通し可能な自然条件を活かして、日本の自動車メーカー各社の工場拠点が集まっている。
4. (E)は、スリー湖の東部に位置する都市であり、オハイオ州への観光基地として知られる。オハイオ州は観光資源であると同時に、水力発電を通じて(E)川の工業化に資した。エリー湖(エ)川と湖を結ぶ内陸水路である(F)運河も、この都市を拠点として1825年に完成している。

問1 空欄A~Fにあてはまる州名、都府名、あるいは河川名を解答欄に記入しなさい。

問2 空欄W~Xにあてはまる河川名を以下の語群から選び、それぞれの記号を解答欄に記入しなさい。  
(イ、コロンビア川) (ロ、マソニシア川) (ハ、テネシ川) (ニ、ハドソン川) (ホ、ミシシッピ川) (ヘ、ミズーリ川)

問3 ①に該当する語句を以下の語群から選び、その記号を解答欄に記入しなさい。  
(イ、大豆) (ロ、トウモロコシ) (ハ、小麦) (ニ、冬小麦) (ホ、綿糸製菓)

問4 下線語(1)に関連して、このような性格を持つ都市として最も適切で該当する都市名を下から選び、その記号を解答欄に記入しなさい。  
(イ、パリ) (ロ、ベルリン) (ハ、ワルシャワ) (ニ、プザベスト) (ホ、ストックホルム)

問5 下線語(2)に関連して、オハイオ州とはほぼ同緯度上にあるラテンアメリカの都市名を下から選び、その記号を解答欄に記入しなさい。  
(イ、ベリン) (ロ、ブラジリア) (ハ、ブエノスアイレス) (ニ、サンティアゴ) (ホ、キウ)

【例題8】 2005年度早稲田大教育学部3】

表2 国公立大二次試験の論述問題の分量とテーマ

	論述 問題数	総字数	1題当たり 平均	テーマ
北海道大	9	500字 前後	50～60字	□地形図読図－地形（河岸段丘）の判定，土地利用の特徴，市街地発達の原因，金属工業発達の原因。 □環境アセスメント法の内容と意図。□サンベルトへの人口集中の原因。□カナートやフォガラの水利権の特徴。□緑の革命の問題点。
筑波大 （自然）	3	800字	267字	□グラフの読み取り－流出高，降水量，気温の季節変化からみた河川（アマゾン川，レナ川，ライン川，利根川）の特徴。□新旧地形図読図（洪積台地）－地形的特徴と土地利用変化。□日本の貿易相手国（1980年と2003年）からみた日本の貿易の特徴と変化とその理由。
筑波大 （自然以外）	3	1200字	400字	□GIS（標高・土地利用・新しい住宅の位置・既存学校の位置）による学校の立地選定。□グラフの読み取り－流出高，降水量，気温の季節変化からみた河川（アマゾン川，レナ川，ライン川，利根川）の特徴。□外国地形図の読図（ドイツ）－自然条件，市街地の形態，交通路などからみた都市の立地と発達。
埼玉大	15	950字 前後	65字前後	□滝線都市の立地要因。□統計地図の表現方法の適否。□首都圏の人口関連階級区分図の読み取り。□地形図判読－洪水対策の特徴，防潮堤の役割，砂防ダム上流部の地形，沖ノ島島に人工物が作られた理由。□地中海地方－気候の成因，観光地の特徴，民家の工夫。
東京大	15	900字	60字	□熱帯雨林利用とその問題点。□企業の穀物農業の特徴。□砂漠化の原因。□エジプトで水資源量が少ないにもかかわらず農業が可能な理由。□日本がフランスに比べて降水量が多いにもかかわらず灌漑農地率が高い理由。□灌漑農業がもたらす環境問題。□北京と秋田の降水量年変化の違いの理由。□上海とウルムチの周辺地域の農業の違い。□ウイグル族の宗教と食生活の特徴。□中国の西部大開発の背景。□咸田空港から北京や上海への航空便利用者増加の理由。□地方中小都市の中心商店街でシャッターをおろしたままの店舗が増加している地理的要因。□山間部の村で民間会社に代わって自治体が行うバスが地域社会に果たしている役割。□三大都市圏都心部で1965～90年に昼夜間人口比率が上昇した理由。□1995～2000年に都心部で夜間人口増加した理由。
東京学芸大	10	750字 前後	75字前後	□ケスタの成因と土地利用。□フェーン現象の成因。□日系ブラジル人受け入れ地域の工業の特徴。□難民が生じる理由や背景。□混合農業の説明。□タウンシップ制とホームステッド法の説明。□合衆国農業の東西地域差の説明。□合衆国中央平原の農業開拓の理由。□地形図読図－集落起源，農業生産。
一橋大	9	1075字	119字	□ブラジル－農業の変化，工業発展の特徴。□ドイツ－人口流入超過の政治的・経済的要因（1950～70年代と1980年代～現在），外国人比率の地域差の要因。□中国－定期市の頻度変化の理由，集落の発達の理由。□電子商取引の特徴と消費形態の変化。
新潟大	6	700～ 820字	117～137字	□日本の水産物の貿易変化の要因。□ドイツの外国人労働者受け入れの要因。□インドのソフトウェア産業発展の要因。□地形図読図－地形形成の要因，都市発達の要因。
福井大	5	480字	96字	□サマータイムの利点。□大陸東岸と西岸で気温年較差が異なる理由。□地形図読図－海岸段丘の土地利用，形成要因，屋敷林の目的。
名古屋大	15	1250字 前後	80字前後	□リモートセンシングの説明。□図の判読－大都市圏におけるコンビニエンスストア数と密度分布の特徴。□欧州で河川交通が発達する地形的，気候的，歴史的な要因。□アフリカ，オーストラリア，シベリアで年間を通して航行可能な河川がない理由。□日本の人口ピラミッドの特徴と1930～2000年の変化。□発展途上国の人口問題。□シンガポールの貿易依存度が100%を超える理由。□日本が最初にシンガポールとFTAを結んだ背景。□シンガポールの民族政策。
京都大	12	505字	42字	□地形図読図－洪積台地の開墾が進んだ地形上の理由，氾濫原の開墾が遅れた理由，防風林の機能，散村の農業経営上の利点。□アフリカの北緯15度付近の気候，植生，農牧業。□ルワンダ大屠殺事件を契機とした多数の人々の国外脱出による経済・社会問題。□インドのコンピュータソフト開発産業の発達要因。□日本の電気機械工業の立地条件。□トゥールーズの航空機製造業の特徴。□イギリス北部の石油化学工業の発達要因。□20世紀後半の世界人口増加の地域的特徴とその要因，問題点。□戦後日本の人口動態の地域的特徴。□日本の老年人口率の地域的特徴。
大阪大	5	700字	140字	□欧州のラテン系諸国の地域格差，地域問題。□ブラジル－アルゼンチンの文化的・民族特色の比較。□合衆国のヒスパニック系住民増加の背景。□北九州工業地帯衰退の背景。□地方の半導体産業の立地条件。
和歌山大	7	350字 前後	50字前後	□地形図読図－カルスト地形の形成要因，土地利用の比較。□合衆国の土壌侵食防止策の説明。□夏乾燥・冬湿潤地域の山羊・羊飼育の理由。□農産物自由化の対立点。□熱帯・亜熱帯地域の農業の経営多角化の理由。□緑の革命の内容。□日本臨海部の基礎素材型工業発展の理由。□北九州の基礎素材型工業停滞の理由。□日本の農山村の産業構造の変化。
長崎大	3	575字	192字	□中国の臨海地域の経済成長の理由。□グローバリゼーションの典型例とその説明。□農業のグローバル化とアグリビジネス・穀物メジャーとの関連。
高崎経済大 （経済中期）	4	250字 前後	60字前後	□エスチュアリーの説明。□日本の近年の出生率低下の要因。□三大都市圏で生じている都市問題。□日本農業の特色。
高崎経済大 （地域政策・ 経済前期）	9	350字 前後	40字前後	□資源ナショナリズムの目的と成果。□地形図読図－油井・ガス井の分布の特徴とその要因，集落形態形成の自然条件，落堀川のもつ通常の河川と異なる特徴とそう判断した理由。
首都大学東京 （都市教養）	8	840字	100字前後	□オーストラリアの都市の規模・機能による分布図の判読－機能判定の根拠，都市分布の特徴と問題点。内陸地域の気候条件と土地条件，環境問題の原因。□分布図判読－人口増加率の高い都市に共通する特徴。□女性の社会進出に伴う問題。□東京の都心回帰現象の背景。□人口減少率が高い都市の産業上の特色。□炭鉱都市の人口減少の原因・背景と地元と及ぼす影響。
首都大学東京 （都市環境）	12	800字 前後	67字（300 字1題）	□利根川の年平均比流量が大きい理由。□年平均比流量の小さな地域の気候の特徴。□ボルガ川の比流量の年変化と自然環境の関連。□地震・火山噴火が日本列島でよく起こる理由。□隆起海岸にもアリス式海岸が形成された理由。□リス式海岸が消滅しなかった理由。□土砂災害を発生させる地形的，気象的，社会的要因。□台風が6～9月に日本本州付近にやって来る理由。□地域調査－地形（洪積台地）と土地利用の変化，農業の変化とその背景，統計資料からみた特徴と変化，年齢別人口構成の変化とその原因，地域的特徴とその変化

※字数が指定されていない場合は，解答欄の大きさからおおよその字数を推測。